
鏡面の空に私は映らない

かまってジョニー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鏡面の空に私は映らない

【Nコード】

N4927BA

【作者名】

かまってジョニー

【あらすじ】

思春期物です。

ファンタジーだったり、文学だったり混ぜられているかもしれません。

私はいつからここにいたのか、それを思い出すことはできない。
ただ、気がついたらこの世界にいた。

一面に広がる青空と、一面に広がる水面が存在するこの世界に。
空は透き通るような青で染められていて、ポツリポツリといくつか
の雲が浮かんでいる。

足元に広がる水面はとても穏やかで、さざ波一つ立てずにキラキラ
と鏡みたいに空を映していた。

どこまで歩いても広がり続ける水面。

彼方に見えるはずの地と天の接合点は、鏡のような水面によってう
まく見ることができない。

上にも下にも、どこまでも透き通る青空が広がっているような
そんな世界。

それが最初、私がこの世界に来てからの感想だった。
広々として、美しく、どこまでも広がり続ける世界。

私はこの世界を駆け回った。

水面の上を、鏡のような水面に映った空の上を走り回った。

私が走り回っても水面にさざ波が立つ事はなく、ただひたりひたり
と吸い付くような感触だけが足裏に残った。

だけど、しばらくして私は気付いた。

どこまでも広々とした世界。どこまでいっても、この世界は何一つ
変わりはない。

青い空と、白い雲と、それを映し出す水面があるだけ。

走っても走ってもそれしかない。

その時、私の中でこれまで感じていた希望や喜びなどという感情が、
儚さと悲しみに変わった。

この世界は広くて美しいけど、それは見方を変えれば、何もないと
いうだけ。

美しいのも空で、私が今立っている水面はその空を映して輝いているだけ。

私はしゃがみこんだ。

今まで感じていたあらゆる物が碎けて、塵になった。

そう思ってきたから、今までこの世界が美しく見えただけだ。

嘘の一面に気付いてしまった私は、もう二度と、この世界を美しいものとして見れないかもしれない。

今まで一つや二つだった雲が、突然増え始めた。

三つ、四つ、瞬く間に増えていき、青く澄み渡っていた空を覆い隠す。

曇り。

これが、この世界の本当の姿。

さざ波一つ立っていなかった水面も、心なしか少し揺れているように見える。

ふと足元を見ると、そこにはあるはずのものが映っていなかった。

どこまでも広い空を映している水面に映っているはずの、私自身がない。

そんな、そんなわけない。

必死で水面を掻きむしった。

私が映ってないはずがない。

だって、あんなにも広い空を映していたのに、あんなにも美しくかった空を映していたのに。

私が映らないなんてことは…

いくら掻きむしっても、水面はまるで私を拒絶するかのように指を滑らせるだけだった。

茫然とした。

——世界に見捨てられた。

そうとは思えなかった。

ひとり、ひとりと吸い付くような足音。

横を見ると、一人の黒いコートを羽織った少年がすぐそばにいた。

白い髪は短く刈り上げられ、無表情だけど優しそうに見える。

透き通るような青い目は、以前この空を染め上げていた色のようにだった。

青年は、コートのポケットに手を入れ、上から見下ろしていた。

「あなたは…だれ？」

「僕はこの世界の住人さ。」

「私になんの用？」

「迷い込んできた時は放って置こうかと思ったんだけど、やっぱりだめだ。」

彼は人差し指を上突き立てて空を差す。

「君のせいだ。」

「わたしじゃない！ この空の、この世界の本当の姿よ。」

ポツリと一滴の雨粒が水面に落ちた。

さざ波一つ立てず、穏やかだった水面に波紋が広がる。

「それは君がそう思うからだよ。 違う見方をすればこの世界だってよくなる。」

彼はコートをためかせると、中に隠してあった剣を勢いよく抜き放った。

「なにを…」

「君はここにいちやだめだ。」

立ち上がるうとした私を、彼は剣を一振りして制した。

よく見れば剣には肝心の刀身がついていない。

「世界は、まだ希望に満ち溢れてる。」

先ほどまで強かった雨が、嘘のようにやんだ。

「見方次第で、いくらでも変わるさ！」

そう言つて彼は刀身が無い剣を空に向かつて高らかに突き立てた。
「光を！」

全てが、止まった。

水面はさざ波立つのを止め、雲は呼吸を止める。

雲の切れ端から、光が、彼の持つ刀身の無い剣に降り注いでいた。
目の前で起きている事態など忘れてしまうほどの、息をのむ美しさ。
知らないうちに、目から涙が溢れ出していた。

この人は希望。

陶醉しそうなほどの感情の波に後押しされて、私は立ち上がった。
ゆつくりと、彼に歩み寄っていく。

「もう、君がここに迷い込む事もないだろう。」

「いや。私、まだここにいたい。」

「それはだめだ。」

「どうして？」

「そういう決まりなんだ。」

「そんなのいや。」

泣きじゃくりながら首を振る私は、彼にはきつとわがままな少女に
しか見えていない。

それでもいい、私は彼の側にいたい。

優しいぬくもりを感じて顔を上げると、私は彼の胸の中に抱かれて
いた。

「大丈夫、君が望めばまたいつか会える。」

「そんなの…」

信じられない、と言いかけて口がそれを止めた。

今、私は彼を心の底から信頼してる。

「ほら、見て。」

彼が指差した水面には、いつの間にか晴れた青空と、彼、そして私
が映っていた。

「準備はいい？」

言葉はない、こくりと首を縦に振ってうなづく。

胸を、温かさが貫いた。

体の中で、いろいろな物がはじける感覚。

希望、勇気、そういった感情が全身を駆け抜けていく。

彼の持っていた剣の刀身、光の粒子をまとった金色の剣が私を貫いていた。

足から力が徐々に抜けていき、意識が遠のいていく。

「またいつか」

目の前が光に包まれていくなか、唇に柔らかな感触を感じた。

目の前は白い。

だけど、ここにはもう透き通るような空も、それを映し出す水面もない。

真っ白な天井を、ハッキリした視界がとらえた。

横では心音機から定期的に音が鳴っている。

私は、たしか車に跳ねられたんだ。

記憶が途切れる前の、クラクションの音、迫りくる車体が鮮明に思い出せた。

両親が喧嘩するのに耐えられなくなって、家を飛び出したあとに、跳ねられた。

そう。その時、私が信じてきた世界は一瞬にして曇った。

足に重みを感じて起き上がって見てみると、父と母がふたりともうつ伏せになってすぐ横で寝ていた。

相当心配したんだろうか、顔には涙の跡がついている。

ああ、今、鏡面の空に私が映っている。

（後書き）

見てくださった方々、ありがとうございました。

一人称の練習がてらに書くこうと思ったもののなにとくに物語をつける気はなかったのですが、なんとなくつけてみました。

一応、とらえ方次第で物事は変わる。

なんていうお堅いテーマだったはずなのですが…

光の剣やら、異世界風になってしまってて少し違っててしまいましたねw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4927ba/>

鏡面の空に私は映らない

2012年1月13日18時47分発行